

# 八・九月の保育

## 生活訓練

倉橋惣三

八月は毎日は幼児の幼稚園へ来ない月でせう。ことしは大學と同じやうに、休みなしといふ急氣込みであられるところもあるかとも思ふが、それにしても所謂「夏の幼稚園」といつた多少特別の形になるであらうし、こゝでは先づ、九月を主にしたのが書かれると思ふ。本誌が八月休刊で、九月に入、九月號を出す仕來りから、一と月飛んで九月のことを仕度くする譯になるのである。その九月は、殊にその初めの方は、土地によつてまだすつかり夏のつとまきのところもあり、土地によつては、急に秋近さを思はせるところもあり、北と南では大分ちがひもある、どうも筆者達が東京で書いてゐるので、季節のあてはまりに、いつも無理が少なくないかと氣にかゝつてゐるが、九月に於て、それが甚しい事になるかも知れない。しかしまあ、秋來ぬと目にはさやかにみえねどもといふ譯だから、そのところは、大目に見ていたゞかう。

さて、私の受持ちの生活訓練に、八月も九月もない。夏だから

二〇

とて秋だからとて、生活が訓練の對象になることに於て變りはない。

訓練にやすみなしで、假りに裸の夏だつて、そこにはその、否々、そこにこそ訓練があるともいへる位である。勿論、原始味を賣しとする裸保育に、そうく窮屈な折目物腰を要求されてはやりきれないだらうが、原始味と無作法とは一つではない。

夏の裸の第一は行動をせしやんとさせることである。だらう、かゞ、にけいなり易い時であるが、給の幼稚園ではなし、そんなだらしないことを許してはならない。廊下を歩くのにのろ／＼したり、保育室の机にぐんにやりと肘つきをしたり、遊園の隅でぼんやりしてしやがんでゐたり、遊戯室のスキップにぐつたり／＼したり、若しもそんな子があつたら、いやんと歩かせ、腰かけさせ、立たせ、飛ばせなくてはならない。但し幼児だからとて鐵製ではないから、強い直射の日和に長く焼いたり、換氣の悪い部屋に大勢を蒸したりして、それでしやんとしてゐるといふのは無理である。第一衛生上の冒險であるから充分注意しなければならぬが、平常の行動は、勵ましてしつかりさせなければならぬ。その行動は、たゞからだの動き方ではなくて、心の持ち方、氣の入れかた、であるからである。又、その行動から、氣の入れ方、抜け方が左右されて來るからである。

おとなの場合、暑さに負けるなどいふことがある。幼児の場合、まけるなななかでなく、暑さに克つてゐる。ところで、その克つてゐるにどうするか。うんと面白く遊ばせるに限る。遊びは眞剣で

ある。眞剣は已れを忘れる。已れを忘れよ暑さも忘れる。汗を流しても、頬をまつかにしても、暑いと感じない子に暑さの苦はない。氣候のいゝ季節よりは自然疲労が多いとして、夕方行水をつかはせて、軽い食事を興へて、さつぱりした寝巻を着せれば、直ぐぐつりと寝入つて仕舞ふ。それでその日中の疲労は一掃されて仕舞ふのである。——それから快い夏の夢と、明け易い夏の朝で、きのふから見れば明日、けさから見れば今日の生活訓練が新たに初まるのである。その、朝の訓練の大切さと實際の一端とは、此の號の「幼児の母」のページに書いて置いた。家庭の領分だから、母によく氣をつけて貰ふより仕方ない。が、それから直ぐ—或は家庭保育につとくのもあり、幼稚園保育につとくのもある。どつちにしても、夏の朝(あしたと讀む)の何んと爽かに快いことよである。

ところで、夏の生活訓練の要訣こゝにありとして、それは方法だけで訓練できるものでない。氣分の訓練が主になつてゐる以上、はたの氣分の如何によつて訓練し得ることである。端的にいへば、姆保さんの氣分がしやんとして居り、その氣分から出る行動がしやんとしてゐないで、幼児をしやんとさせることは出来ない。ぐつたり先生、ぐんにやり先生、といつた、夏負け先生に幼児の夏の訓練は出来ない。きりつとした夏姿に、すつきりとした身のこなし、はき、した言葉、さへ、とした表情。幼児もそれに勵まされずにあらないであらう。更に遠慮なくいへば、夏ほど先生のみだしなみの大切な時はない。どうせ汗を流して飛びまわつてゐ

るのに、そんなにスマートな夏化粧、夏衣装は望まれないけれども、よこれた髪、なよ／＼の襟、そろ／＼の裾、べちや／＼の穿きもの、それでは風爽かな夏の幼稚園の繪にならない。どいつてまた、つくり衣紋に、べら／＼袖、ひきすり袴、動きを嫌ひ、汗を厭ふ、しやなり／＼では問題にならない。幼児に對しても、汗を出させないことを之れ躰げとする位のものであらう。(少々筆が走り過ぎたようですが、夏は何んでも、さつくばらんがいでせうから、さしさわりがあつたら御免なさい。)

#### さて、九月新保育期。

「系統的保育案の實際」の九月第一週の初めに「夏休み後の注意として諸規則を正し遊びの後仕末をよくすること」とある。休みといふにしてもいはないにしても、暫くでも家庭だけの生活にじだらくな癖がついたとすれば、再開の第二保育期は、先づ引きしめから始められる必要がある。新入園の第一保育期初めには、いきなりひきしめないで、そろ／＼と、いつの間にか幼稚園生活に慣らせてゆくといふことを秘訣とする。第二保育期はそれと違ふ。既に幼稚園生活といふものを知つてゐる子ども達である。しつかりしやうとすれば出来る筈の子ども達である。それをしないのは、ねじのゆるみである。早速巻きなほさないといけない。殊に、いくらか、なれのおこたりもある。新規に氣を入らせなければならぬ。休み前にはちやんと出来てゐた生活をもとにして、さつさと其の通りさせてゆかなければならぬ。

斯ういふと、理窟づめに推してばかりあるやうでもあるが、そうでない。こゝに一つの大きな譯は、第二保育期になると、幼児の心構へがぐつと違つて來てゐることである。見上げるほどに、一寸おかしいほどに、幼稚園園児としての生活感情が發展し、確立し、強化してゐるのである。それに裏づけられて、訓練もぐつどし易くなる。軽い意味で自尊心に訴へるといつた譯合である。がしかしまた、そうだから、訓練がむづかしくなるどころもある。すなはち、九月こそは、園児の生活訓練の大切なきつかけになる。しまるのも此の時、ゆるむのも此の時。そう充分にしまることはむづかしいとして、ゆるめないことは、九月の用心といふものであらう。

總じて、幼児は元來がそうじだらくなものではない。禁けといひ訓練といひ、何んだか、外から無理押し、強制的壓力の感じの伴ふのが一般であるが、決して、そうとのみ限らない。それどころか、きちんとした生活は、幼児の自ら求めるところといつてもよい。家庭ではみんながちゃんとしてゐないのに、自分だけちゃんとするのがむづかしかつた。又、なんだか却つてきまりが悪いといつたところもあつた。それが、お休みの間、楽しみに待つてゐた幼稚園、憧れもし、自らの誇りともしてゐた幼稚園へまた來たのである。先生の向きの向けかた一つで、喜び勇んで駆けられるし、求めて訓練されようともするのである。

## 自由遊戯

上遠文子

幼児ながらも何とはなく緊張した夏休みをすませ、陽焼けした元氣な顔を並べてくれる。

年少組では特に感じられる事ですが、家庭生活にもどりが過ぎ團體生活にもどりにくい此頃の幼児達を、先づ自由遊戯をもつて、早く團體生活氣分に引もどし、家庭幼児であり且幼稚園の幼児たらしめたいものであります。

このことは九月の仕事として先づ考へる事でありませう。

しやがみ鬼 鬼ごつこの類で、しやがみ事を陣の代用とする鬼ごつこで、年少組にもわかり易く、又面白い遊びであります。

兵隊ごっこ(含戦争ごっこ)、何と云つても男の子がもつとも好み、もつとも愉快とする遊びであります。唯の訓練的遊びに止るもの、假想の敵(あるものとしてゐる)のある場合、組の中で、又は他の組と對抗してするもの種々行はれますが、私達は特に、どの程度まで進行して指導すべきかを考へねばなりません。度を過ぎるとその遊戯は争闘に化してしまひます。先づ私達は戦闘が開始されましたら常に監督を忘れぬことです。附屬幼稚園でもどうかすると組對抗の戦が始まりますがしかしその時、戦闘開始か否かは擔任の命令即ち總指揮官の命の下るのを待つ事に約ししました。部隊長、隊長その他は何れも子供達同志で決め合つてゐるも